

令和4年6月3日

梅雨期の低温・長雨・日照不足による農作物への影響と対策について

農業総合センター
専門技術指導員室

●気象情報

低温に関する早期天候情報(2022年6月2日14時30分気象庁発表)によると、関東甲信地方では、6月8日頃から、かなりの低温となる見込みです。また、1か月予報(2022年6月2日14時30分気象庁発表)によると、向こう1か月(06/04~07/03)の降水量は多く、日照時間は少ない見込みです。日々の気象情報に留意しながら農作物の管理等に十分注意してください。

●影響と対策

1 普通作

【影響】

水稻では、生育ステージにもよるが、①草丈の徒長、②生育の遅延、③倒伏、④登熟不足による玄米品質の低下、④いもち病などの病害の発生、等の影響が懸念される。

麦類では、赤かび病や穂発芽の発生、刈遅れによる品質低下が懸念される。大豆では、湿害による苗立ち不良、徒長による倒伏、着莢不良、粒の肥大不良、紫斑病、べと病、葉焼け病の発生が懸念される。

【対策】

(1) 水稻

- ・窒素の追肥に当たっては、梅雨明け後に生育が過剰になり倒伏等を引き起こす恐れがあるので追肥の中止や大幅な削減等を検討する。
- ・いもち病の防除については、予防粒剤を施用している場合でも、感染好適日が続く、病斑の発生及び上位葉への葉いもち病勢の進展が懸念される場合には、雨の切れ間等をねらい、防除適期を逸しないように適切な追加防除を実施する。
- ・倒伏が懸念される場合には、倒伏軽減剤の使用を検討する。
- ・幼穂形成期には幼穂を低温から保護するために水管理が可能な水田では深水管理を行う。

(2) 麦類

- ・収穫適期チャートを参考に収穫適期を判定し、収穫日を逃さないようにする。明渠などを点検して、雨が止んだ後できるだけ早くほ場から排水されるようにしておく。
- ・赤かび病については、ほ場での発生状況を確認し、ほ場毎もしくはほ場内でも発生程度により刈り分けし、健全なものと混合しないようにする。
- ・倒伏し、穂発芽が確認されたほ場については、赤かび粒発生リスクも高まるため、

ほ場毎もしくはほ場内で刈り分けを行う。

- ・収穫は、穀粒水分30%以下が原則である。やむを得ず高水分収穫となる場合には、以下の注意が必要となる。ただし、高水分収穫も穀粒水分35%が限界である。
 - ① コンバイン収穫で損傷粒が発生しないように、扱き胴の回転を遅くして行う。
 - ② 刈り取り後速やかに乾燥機に搬入し（一時貯留は行わない）、乾燥初めの2時間程度は通風のみの乾燥とし、その後も通風温度40℃以下とする。
 - ③ 高水分で収穫された麦については、区分して乾燥調製を行い、取り扱いについて関係者間で十分協議を行う。

（3）大豆

- ・降雨時に速やかな排水が可能となるよう、ほ場の状況に応じ、簡易暗きよの施工、ほ場内及びほ場周辺の排水溝の設置等の営農排水対策をあらかじめ実施する。特に排水不良田では、湿害を回避するため、営農排水対策を徹底する。
- ・生育初期に湿害を受けた場合は、湿害の程度に応じて播きなおしを検討する。その際晩播は生育量が低下するので、播種量を増やすなどの対策により、生育量の確保に努める。
- ・連作するほ場では、土壌中の可給態窒素の減少や土壌のち密化により透水性が悪化している可能性が高いことから、播種前に有機物の施用等により土壌の物理的、化学的性質の改善を図る。

2 野 菜

【影響】

品目や生育ステージにもよるが、①土壌水分過多によって根の機能が低下し、草勢の低下や生育初期の立枯れがおきる、②日照不足により光合成が充分に行なわれなくなり、草勢の低下や生育遅延がおきる、③高湿度や草勢の低下により、うどんこ病やべと病、さび病等の病害の発生が増える。

【対策】

（1）野菜全般

- ・茎葉が軟弱徒長しやすいことから、施肥は控えめとし、灌水は天候や土壌条件、生育を確認しながら加減する。
- ・果菜類では着果過多を避け、可能な場合は早めに収穫して、株への負担を軽減する。
- ・苗床では、苗の間隔を充分に取り、採光性、通気性を良くする。
- ・曇天後に、急に晴れて高温強日射に曝されると、激しい萎れを起こすことがあるので、予報に応じて速やかに遮光を行なえるよう準備しておく。
- ・病害虫の発生が多くなるので、適宜下葉かきを行い、発生初期からの防除を徹底する。連続した降雨が予想される場合は、雨の合間を縫って防除を実施する。
- ・薬剤散布を行なう際、作物が軟弱な生育をしている場合は薬害を生じやすいので、使用基準の範囲内で散布濃度を低めにする等の配慮をする。

（2）施設野菜

- ・施設内で湿度の高い空気が滞留しないよう、換気に努め、可能な場合は循環扇も利用する。

(3) 露地野菜

- ・梅雨時期に定植する野菜については、地下水位が高いほ場や排水性が悪いほ場では高畦とし、可能な場合はマルチ栽培とする。
- ・生育期に畝間に帯水した場合は排水路につながるよう溝を切る。
- ・イモ類は、長雨等でほ場に滞水すると塊茎腐敗を起こしやすいので、排水溝の設置等により速やかな排水に努める。

3 果 樹

【影響】

病害の感染拡大で早期落葉が助長されると、休眠芽の充実不良や貯蔵養分の蓄積不足が懸念される。

【対策】

(1) 果樹全般

- ・病害の発生に注意を払い、病虫害参考防除例に準じて、雨の合間を縫って確実に防除を行う。また、病虫害発生予察情報を参考に病虫害の発生、被害防止に努める。

(2) 施設果樹

- ・施設内で湿度の高い空気が滞留しないよう換気につとめ可能な場合は循環扇も利用する。

4 花 き

【影響】

長雨により日照時間が不足すると、品目や生育ステージにもよるが、①軟弱徒長による生育不良、品質の低下、②根腐れによる立枯れ症状の発生、③灰色かび病やべと病、さび病等病害の発生、④花芽分化・開花の遅れによる需要期・計画出荷への影響等が懸念される。

【対策】

(1) 花き全般

- ・茎葉が軟弱徒長になりやすいことから、多肥を控えるなど施肥量に留意するとともに灌水も控えめとする。
- ・日長により花芽分化や開花に影響が大きい品目では、花芽分化の状況を確認するとともに、開花調節（キクの電照等）を行っている場合は、品目・品種に合わせた管理・調整（消灯時期の調整）を徹底する。
- ・病害の発生が多くなるので、発生状況を観察し、防除を徹底する。連続した降雨が予想されている場合は、雨の合間を縫って防除を実施する。
- ・薬剤散布を行う際、作物が軟弱な生育をしている場合は薬害を生じやすいので、使用基準の範囲内で散布濃度を低めにする等の配慮をする。

(2) 施設花き

- ・長雨が続く場合、施設内への雨水流入や地下水位の上昇を防ぐため、周囲に暗渠や明渠を設け、排水対策を行う。
- ・できる限り被覆資材（天井やカーテン）は新しいものを利用し、日照不足にならないようにする。
- ・多湿条件になると病害が多発するため、ハウス内が過湿にならないように、換気を十分にを行い（可能な場合は循環扇の利用）、防除を徹底する。

（３）露地花き

- ・排水対策として、ほ場周囲に暗渠、明渠を設置し、ほ場内に雨水が停滞したり、冠水しないように注意する。
- ・梅雨時期に栽培する場合、地下水位が高いほ場や排水性が悪いほ場では、高畦栽培が効果的である。
- ・湿害により、根の活性が低下すると、生育・品質に影響が出るので、状況に合わせて葉面散布を実施し、生育・樹勢の回復を図るとともに適宜防除を行う。
- ・長雨・低日照後の強日射は、株の萎凋や葉焼けの発生が懸念されるので（特にグラジオラス）、寒冷紗等による遮光の準備をしておく。